

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C) (特設分野研究)

研究期間：2014～2017

課題番号：26520107

研究課題名(和文) 高齢化が進む離島集落の再編に資する横断的研究

研究課題名(英文) Cross-sectional Study Contributing to the Reorganization of Remote Island Villages with Aging Population

研究代表者

安武 敦子 (YASUTAKE, Atsuko)

長崎大学・工学研究科・准教授

研究者番号：60366432

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：日本で加速度的に高齢化が進むなか、離島はその先陣を切って進んでいるといえる。離島集落は管理能力不全が起こり始め、集落の再編期に直面するなか、コンパクト化に向けて進んでいく傾向が見られる。しかし予備調査から、離島では相当の対価を支払っても、現住地に居住継続したいという結果を得た。地域の特色と居住傾向がどう関係しているのを見ると、結果として居住者の満足度や生きがいの差は立地や利便性と強い関連性は見いだせない。隔絶性の高い地域で、高齢者が自発的に活動に参加し、また廃校の活用においても、多くの主体によって複数の空間が複数の用途に柔軟に活用されるなど、地域や個人の自立性が高いことが推察できる。

研究成果の概要(英文)：With accelerating aging in Japan, remote islands are running ahead of that. In remote island settlements, management capacity failure began to occur, and in the face of the reorganization phase of the settlement, there is a tendency to progress toward compactification. However, from the preliminary survey, people in remote islands gained the desire to continue residing in their residence even if they paid consideration. Looking at the relationship between the characteristics of the area and the tendency of residence, we can not find a strong relationship between the satisfaction level of residents and the difference in motivation and the location and convenience. Elderly people in regions with high isolation tend to voluntarily participate in regional activities. Looking at the utilization of idle facilities, it can be inferred that various groups, multiple use of space, utilization of multiple uses can be observed, and autonomy of the area and individual is high.

研究分野：建築計画

キーワード：離島 高齢者 空き家 エリアマネジメント 伝統 まちづくり

1. 研究開始当初の背景

日本で加速度的に高齢化が進むなか、離島はその先陣を切っているといえる。現在の課題として離島集落は管理能力不全が起り始め、集落の再編期に直面している。しかし集約する議論、維持する議論が統合されないまま、施策等の方向性は一面的な評価によってコンパクト化に向けて進んでいく傾向が見られる。離島（長崎県対馬市）の先行調査から、周縁部の居住者は居住を継続するにあたり、相当の対価を支払っても居住継続したいという結果を得た。多角的に集落を検証し、持続可能な離島集落の形成に資する集落再編のシナリオを提示する必要がある。

2. 研究の目的

伝統的な集落は共済的性格を有していたため、それらがどう縮小や外部化、他者依存等しながら現在に至るのか、地域の特色と居住傾向がどう関係しているのかを明らかにし、高齢化や財政縮小のなかエリアマネジメントを今後どう再編していくのかの知見を得ることが目的である。

3. 研究の方法

離島が抱える福祉や空き家、伝統芸能の継承、公共工事、耕作放棄地等の課題を抑えるため、長崎県五島市のすべての支所に対してヒアリングを行った。平成26年に65歳以上の五島市民を対象として実施された「五島市高齢者アンケート調査（以下「高齢者アンケート）」を用いて高齢者の実態を居住地エリア、利便性、身体状況ごとに考察する。さらに中学校区別の高齢者の割合とサークル活動や町内会活動等への参加状況をクロス集計し、両者の統計的関連性を検証するために χ^2 検定を行った。図1は五島市を中学校区で分割したもので、①が現市役所所在地で唯一総合病院があり長崎市への港など五島の中心である。旧町役場が②、③、④、⑥、⑨に位置していたため支所や銀行があり商店街が形

番号	中学校区	回答者数
①	福江	789
②	富江	253
③	三井楽	190
④	岐宿	166
⑤	翁頭	162
⑥	玉之浦	140
⑦	崎山	110
⑧	奥浦	57
⑨	奈留	120
⑩	久賀	18
⑪	椀島	13
⑫	嵯峨野島	3

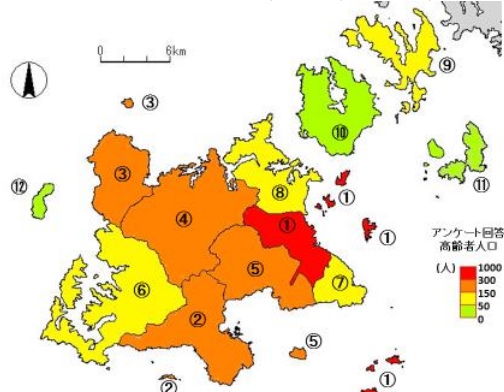


図1 五島市の中学校区別アンケート回答者数

成されている。島を十字型に縦断横断する道があり中央部にロードサイド型の大型商業施設がある。

さらに公共施設の再編で増加している廃校の地域資源としての再活用に着目し、五島市に加え、一次離島・二次離島の数等の地域構造が異なる長崎県新上五島町に対して、教育委員会へヒアリングを行い、活用する主体、用途、空間を捉え、それぞれ数の平均の多少による類型化から把握した。

離島との比較対象として長崎市周辺部で景観や防災、福祉を核としたまちづくりを行っている深堀地区や首都圏郊外部農村の茨城県小美玉市に着目し、地区内の組織構成や自治体・大学との連携とまちづくりの進展、伝統文化の継承等を追跡した。

4. 研究成果

本稿では五島市の高齢者と廃校活用を中心に報告する。

(1) 離島における高齢者の実態

① 校区別の状況

世帯構成：五島市全体の平均は、「一人暮らし」が約30%、「二人暮らし」が約46%で、校区間の大差はないが二次離島は「一人暮らし」の割合がやや多く40%を超えている。

介護：五島市全体では、「介護・介助は必要ない」が約69%、「何らかの介護は必要だが現在は受けていない」が約9%、「現在何らかの介護を受けている」が約22%である。二次離島で介護・介助が必要だが受けていない、もしくは受けづらい人が若干多い傾向にある。生活のゆとり：五島市の平均は「苦しい」が約21%、「やや苦しい」が約37%で苦しい傾向が6割弱、「ややゆとりがある」が約33%、「ゆとりがある」が約4%という結果となった。内閣府が行った、平成26年度高齢者の日常生活に関する意識調査結果は、「苦しい」が約12%、「やや苦しい」が約37%で半数以下に留まり、「ややゆとりがある」が約38%、「ゆとりがある」が約12%という結果で、五島は経済的には苦しい傾向にあるといえる。

生きがい：生きがいがあるかについて五島市の平均は、「はい」が約54%、「いいえ」が約22%であった。一方、健康状態の平均は、「とても健康」が約8%、「まあまあ健康」が約43%、「あまり健康でない」が約25%、「健康でない」が約17%で、「生きがい」と「健康」をクロス集計すると強い関連性が見られ、自分で自分を健康と評価している人ほど生きがいがあると答えている。

その他の設問も含め、全体的に校区ごとの差は少ない。

② 日常生活の利便性との関係

日常生活維持に日用品などが集積している日常生活のコアとして郵便局に着目し、郵便局が徒歩圏にあるかないかで地区を分けて分析した。郵便局から徒歩圏＝半径400mの円に集計単位の地区が50%以上含まれる

地域を「利便地域」とし、そこに含まれない地域を「周辺部」とした。対象地は人口が最大で中心である福江①、島が市役所所在地と別で旧役場があり高齢化率が高い奈留⑨、市役所のある福江島内だが中心地より遠く高齢化率が最も高い玉之浦⑥の3地区でみた。介護：特徴的なのは、⑨の周辺部で「何らかの介護・介助は必要だが現在は受けていない」が高く、⑥周辺部では「介護・介助は必要ない」が高い。⑥周辺部は介護・介助が必要になると移動している面があると考えられ、⑨周辺部では相互扶助などで生活できる、なかなか移動できないなど両面の理由が考えられる。

生活のゆとり：五島市の平均と変わらない地域が多いが、⑨周辺部で苦しい傾向の人が平均を10ポイントほど上回り、ややゆとりがあるが10ポイント下回っており経済的に厳しい人が多い状況がうかがえる。一方①の利便地域でも、市役所が位置する地区で苦しい傾向の人が80%を超えていた。

友人との行き来：五島市全体の平均は、「はい(している)」が約51%、「いいえ」が約43%だったが、⑨奈留と⑥玉之浦では、利便地域に比べ周辺部の方が友人を訪ねる人が多い。生きがい：五島市平均「はい」約54%、「いいえ」約22%に対し、⑥玉之浦の周辺部で生きがいがないと回答した人が20ポイント以上多く存在している。逆に、⑨奈留は利便地域の方が生きがいを持たない人が多い(図2)。

結果として居住者の満足度や生きがいの差はそれほど大きくない。都市部の人間は、交通や買い物に不便な地域の人々は大きな苦勞していると考えがちだが、利便性を求めないあきらめの要素や今ある環境で暮らしていく覚悟なども加わっていると考えられるが、それぞれの環境のなかで満足や不満を抱えて同様の生活している。

③身体状況との関係

生きがいについて抜粋すると、五島市全体では、介護・介助は必要ない人は「はい」が約63%、何らかの介護・介助は必要だが現在は受けていない人は「はい」が約44%、現在

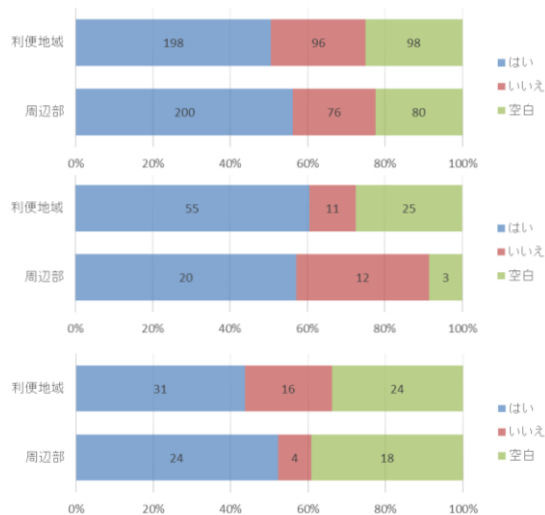


図2 日常生活の利便性と生きがいはあるかの関係 (上段①福江, 中段⑥玉之浦, 下段⑨奈留)

何らかの介護を受けている人は「はい」が約37%で身体状況と生きがいに関連性が見られる。特に①福江では身体状況が悪くなると生きがいがなくなる傾向が見られるのに対して、⑥玉之浦や⑨奈留では関連性が低い。さらに、利便地域、周辺部に分けると、⑥玉之浦では、利便地域は被介護者であっても生きがいのある人が多いのに対し、周辺部の被介護者は生きがいを持つ人が少ない。

④家族形態との関係

家族形態を、一人暮らし・家族と同居・その他(施設入居など)に分類し、クロス集計を行った(図3)。生きがいについてみると、一人暮らしよりも家族と同居の方がであると答えている。玉之浦地区の「その他」の回答者は90%以上が「はい」と回答しており、老人ホームなどで生きがいを見出していると考えられる。

⑤各種地域活動への参加

各種活動の参加率の平均は、19.4%である。平均と比べて参加率が高い活動は、町内会・自治会、地域の生活環境の改善(美化)活動であった。町内会・自治会への参加率が27%、地域の生活環境の改善(美化)活動への参加率が21%と高く、趣味関係のグループへの参加率が19%、スポーツ関係のグループやクラブ、ボランティアのグループへの参加率が15%とやや低い結果となった。

校区を高齢者率の高い校区と低い校区に分類し、地域での各種活動への参加状況との関連性を見たところ、スポーツ関係のグループやクラブ・趣味関係のグループ・地域の生活環境の改善(美化)活動・町内会・自治会への参加状況には、 χ^2 検定の結果、有意な差が生じなかった。高齢者とボランティアのグループへの参加状況と高齢者率には有意な差が生じた。具体的には、高齢者率の高い地域の方が高齢者率の低い地域よりもボランティアのグループへの参加率が高かった。要因としては、高齢者率の高い中学校区の特徴が考えられる。⑩久賀、⑪枕島、⑥玉之浦は、二次離島や福江島の縁辺部等の隔絶性が高い地域である。そのため地域の諸問題に対しては、地域の取り組む課題が多いという点で、高齢者率が低い地域よりも自発的に活動に参加する必要性が生じたために、住民の自主性が身に付けられたと考えられる。また、隔絶性が高い地域であるために、集落の存続に係るボランティアの活動に参加する意欲が強いことが考えられる。

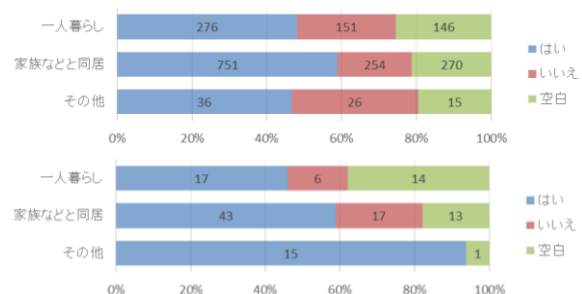


図3 家族形態と生きがいはあるかの関係 (上段五島市平均, 下段⑥玉之浦)

⑥地域別の廃校活用の実態

1946年から2016年までの廃校の推移や量は両自治体とも類似しており、廃校数は、新上五島町46校、五島市49校である。現在、総数42箇所の廃校があり、校舎のみ現存しているものが11箇所、体育館のみ現存しているものが4箇所、校舎と体育館ともに現存しているものが23箇所であった。グラウンドは42箇所すべて現存、プールは2箇所のうち1箇所現存していた。それらの活用の仕方は、新上五島町の廃校20箇所は、体育館単独活用型10箇所(50%)、次いで全施設活用型5箇所(25%)と未活用型5箇所(25%)と並び、校舎単独活用型0箇所(0%)の順である。五島市の廃校22箇所は、校舎単独活用型が11箇所(50%)、次いで、全施設活用型5箇所(23%)と未活用型5箇所(23%)が並び、体育館単独活用型1箇所(4%)である(図4)。校舎と体育館の活用のされ方に大きな差異がある。新上五島町は鉄筋コンクリート造の校舎が多く、校舎改修費用が高額になることが要因として考えられる。五島市は木造校舎が多い。活用用途は、学校・保育施設、福祉・保健施設、社会文化施設、社会体育施設、資料館・記念館、民間施設、指定避難所、倉庫の8つに分類できる(図5)。活用主体は両方とも3分の2を自治体が占める。

地域構造を一次離島・二次離島、中心地からの距離で分類すると、二次離島及び一次離島の中心から離れた廃校では、複数の空間が活用されることが多く、より多くの主体によって活用され、複数の用途に活用されることがわかった。

(2) 伝統的景観の集団的な維持

① まちづくりへの位置づけ

茨城県県央の農村部である旧美野里町において伝統的景観に一役買っている長屋門は、18世紀前半から登場し、藩政のなかで名主をはじめとする富裕な農家で、幕末期の国替えによる領地の細分化や相給地の増加という支配体制の影響で数多く建設された。建設は明治以降も、裕福でかつ本家であるなど江戸時代に建設された家と同等の格を持つ家の間で、家格の象徴として普及したと捉えられる。戦後からは隠居を主としながら、第三者への貸し出しや公共的活動の場の提供など、母屋と切り離された分棟の空間構成

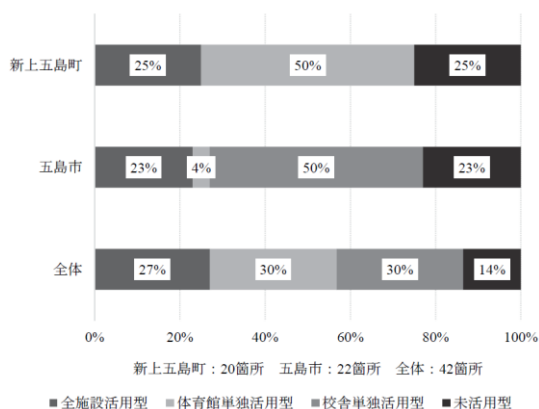


図4 新上五島町及び五島市における廃校の活用空間

によって地域の要求を補完して継承されてきたが、近年は4割を未利用が占める。離農や生活の変化で機能的には不要になりつつある長屋門を、2000年代より総合計画策定のなかで残すべき経験として抽出するなど、所有者と、新規居住者を含む市民とで協力体制が築かれつつある。

② 第三者との連携

長崎市深堀地区は武家地に石堀の残る歴史的な地域であるが、三菱造船香焼工場に近く公営住宅や新規の住宅などが混在する地区となっている。そこで石堀を含む歴史的な景観をまちづくりの種として取り組んだ約3年間の活動に、研究代表者が所属する長崎大学は支援側で参加し、ガイドラインを作成した。そのプロセスを通して、外部者との協同のあり方を考察する。

これまで福祉や防災の観点から行われていた活動を景観の視点から洗い直し、アンケート調査、先行事例の紹介や外部から見た評価などを行い、10のポイントに大学が整理した。10のポイントに関連する活動の実践によって、ガイドライン策定に必要な情報収集と景観まちづくりに対する地区住民への普及啓発を行った。最終年度は地区住民の詳細な意向の把握が必要と判断された景観構成要素のデザイン指針に関わる情報をワークショップ形式で収集し、完成させた。

大学は、策定過程における価値中立的な立場での関与を通じて、策定過程の信憑性の担保に寄与したといえる。また専門性を有する大学は、ガイドライン作成への関与によるガイドラインの質の向上とともに、専門的見地からの対象地区の景観の評価と評価結果の発信を行うことにより景観の価値の普及啓発にも貢献したといえる。

地区住民の建設行為にはガイドラインを積極的に採用した形跡が見いだされた。歴史的景観の多くは所有者によって守られてきた。行政による助成メニューは増えているが、今後は所有者と行政だけにコントロールを委ねるだけでなく、地域においてまちづくりの要素として位置づけ、大学など第三者による価値づけを行い共有財産であるという認識を醸成していくことが導出される。

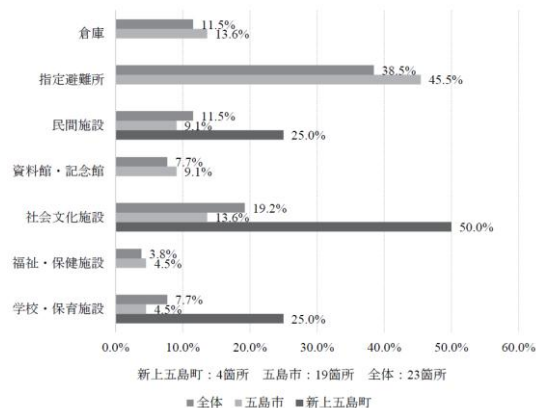


図5 新上五島町及び五島市における廃校の校舎の活用用途の構成

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 安武敦子, 大月敏雄, 深見かほり, 農村部の長屋門の成立過程と利用の変遷に関する研究 : 茨城県県央の事例を通して, 日本建築学会計画系論文集 vol. 82, No. 736, pp. 1467-1474, (2017. 6)
- ② 渡辺貴史, 安武敦子, 長崎県長崎市深堀地区における景観まちづくりガイドラインの策定過程と運用, 造園技術報告集, 9号, pp. 126-131 (2017. 3)
- ③ 迫宏幸, 安武敦子, 地方都市における公共施設の実態と再編可能性に関する研究, 長崎大学大学院工学研究科研究報告, 第46巻, 第86号, pp. 58-63 (2016. 1)
- ④ 清田翔太郎, 坂本麻衣子, 安武敦子, 対馬市における地域振興策の検証分析, 地域学研究, 45巻, 4号, pp. 435-447 (2015. 3)

⑤

[学会発表] (計 1 件)

- ① 渡辺貴史, 地方中核都市における景観まちづくりガイドラインの策定過程と運用実態, 日本造園学会平成 29 年度全国大会ミニフォーラム第 2 回風景計画研究・事例報告会, 2017. 5. 19

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安武 敦子 (YASUTAKE, Atsuko)
長崎大学・工学研究科・准教授
研究者番号 : 60366432

(2) 研究分担者

渡辺 貴史 (WATANABE, Takashi)
長崎大学・水産・環境科学総合研究科
(環境)・教授
研究者番号 : 50435468

才津 祐美子 (SAITSU, Yumiko)
長崎大学・多文化社会学部・准教授
研究者番号 : 40412613

佐々木 謙二 (SASAKI, Kenji)
長崎大学・工学研究科・助教
研究者番号 : 20575394

(4) 研究協力者

迫 宏幸 (SAKO, Hiroyuki)
長崎大学・工学研究科・大学院生